バカと僕とFクラス

レンテン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと僕とＦクラス

【Ｎコード】
Ｎ１１６９Ｓ

【作者名】
レンテン

【あらすじ】
彼は試験召喚システムを導入した試験校「文月学園」にいるどこにでもいそうな高校生「小鳥遊　友祐」彼は振り分け試験の時に名前を書き忘れるというミスをしてしまい学校の最下位クラスのＦクラスに入ることになってしまったそこで彼が見た物とは！・・・そんなＦクラスを中心に友祐や個性豊かな仲間達が繰り広げる物語とは・・・。
バカとテストと召喚獣の二次制作です。
現在いろいろあって更新不可です、

一応完結にしておきます全然話は進んでいませんが、
まぁ待ってる人も居ないと思うのでいいのですが。

主人公設定？（前書き）

文章力が無くバカで頭の悪い作者ですががんばって書いていこうと思います。

主人公設定？

主人公設定

名前　小鳥遊　友祐１６歳。
　　たかなし　ゆうすけ
身長　１６５ｃｍ　体重５０ｋｇ
趣味　体を動かすこと、ラノベなどなど・・・。
特技？　家事全般、人間観察。
特徴　頭の回転が速く手先が器用、情報収集が好きなのでムッツリーニとは仲が良い？
性格　基本は優しくのんびりしている、友達に手を出した者や悪い奴には容赦がない。
モットー　『恩も恨みも忘れない』『暴力は良くない』『臨機応変』
好きな物（人）　優しい人、一生懸命な人、甘いものには目がない。
嫌いな物（人）　外道な奴、人の気持ちをバカにする人。
得意な教科　理系でその他はほとんど平均点より少し上くらい
不得意な教科　英語は壊滅的で明久より悪い！？

容姿　たれ目で口調ものんびりしている、体型は少し痩せ型で、目が少し悪くたまにめがねをかける。
木下家のお隣さんで木下姉妹とは幼馴染。

木下　秀吉
原作キャラですが少し頭が友祐のおかげで良くなっていきます

第1話（前書き）

やっと第1話です。

第1話

「・・・ふぁ～・・・もう朝？」
僕は『小鳥遊　友祐』文月学園に通ってもう1年が経とうとしていた。
「・・・さて今日も一日始めますか。」
友祐は起き上がり自室を出て洗面所に向かった。
朝食と洗濯を済ませた友祐はお隣の木下家に来ていた。

ピンポーン
「はーい？」
ガチャ
「おはようございます柚葉さん」
「あら、小鳥遊君今日もごめんねぇ」
この人は『木下　柚葉さん』秀吉達のお母さんだ。
「いえいえ、大した事じゃないですから、おじゃまします」
そう言って僕は二人を起こしに行く。

コンコン
「起きてる～？」・・・反応が無い。
「入るよ～」ガチャ

そこにはすぅすぅと息を立てながら寝ている秀吉がいた。
「秀吉～朝だよ～」
そう言いながら僕は秀吉を起こす。
「・・・んぅ、わしは男なのじゃ・・・」
何を言っているんだこの子は・・・。
「早く起きて～」

そう言って僕は秀吉から布団を奪う。
「んぅ～～～ふぁ、おはようなのじゃ友祐」
「やっと起きた？早くしないと遅刻するよ？」
「うむ、そうじゃの」
そう言って秀吉は洗面所に向かった。
「さて次は優子を起こしに行きますか・・・」
そう言いながら優子の部屋に向かった。

コンコン
「起きてる～？」・・・反応が無い。
「入るよ～」ガチャ

そこにはあられもない姿で優子が寝ていた。
「相変わらずすごい・・・」
そう呟いていたら優子が起きたようだ。
「おはよう優子」
「おはよう友祐　（ニコッ）」
「どうしたの優子？・・・僕の間接はそっちには曲がらな・・・ギャアアアアアア（バキ）」

第1話（後書き）

学校に着けなかった・・・がんばって更新していきたいです。

第2話

「うぅ～、朝から酷い目にあったよ」
「災難じゃったのう」
「アンタが勝手に人の部屋に入るからでしょ」
「僕はちゃんとノックもしたし起きてるかも聞いたのに・・・それに僕が来る前に起きればいいんじゃ・・・すいませんでした～、だから間接だけは・・・」
「ん？何のこと？」
「いえ・・・何でも無いです・・・」
「ところで二人とも振り分け試験どうだった？」
「あたしはいつも通りの点を取れたからたぶんAね」
「わしはFかのぅ」
「僕もFかな」
「！秀吉は良いとして何でアンタがFなのよ」
「ちょっと前日の夜に野暮用があってね～・・・秀吉そこで音を消して泣かないの」
秀吉が「なんでわしはいいんじゃ」とヵ言いながら泣いていた。
な～んてことをやっていたら学校に着いた。

ここは文月学園
新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校。
学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学校。
それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い。

その学校の校門の前に一人、短髪で筋肉の塊のような人がいた
「「「西村先生おはようございます」」」

この人は西村先生、生徒からは鉄人と呼ばれている、理由は趣味がトライアスロンで鍛えられたその肉体、真冬なのに半袖って・・・人間とは思えない。
「あぁ、おはよう、木下姉弟、これが振り分け試験の結果だ、小鳥遊、お前は残れ」
『振り分け試験』文月学園は二学年になる時に試験の結果によってクラス分けするクラスはA～FまでありAから学力の良い生徒を入れていく、学校の設備もAに近づくほど設備が良くなる。
「はい分かりました、秀吉、優子、先に行ってて」
「うむわかったのじゃ」
「じゃあ先に行ってるわよ」

「何ですか？先生」
「小鳥遊お前ならBかAは行けたと思うんだが・・・」
「睡魔と闘って勝ったのはいいんですがまさか名前を書き忘れるとは・・・」
「まぁいい自分のクラスに行って来い」
「はい」

「友祐こっちじゃ」
玄関を入っていったら秀吉に呼ばれた。
「二人ともごめんね」
「まぁいいわ、行きましょうか」

「ここがAクラスかぁ広いねぇ」
「リクライニングシートに冷蔵庫に個人エアコンにノートパソコン・・・ここは高級ホテルのロビーみたいじゃのう」
「本当だね」

「じゃああたしはここだから」
「じゃあまた帰りに」
そう言って優子はＡクラスに入っていった
「じゃあ僕たちも行こうか」
「そうじゃな」
そう言って僕らはＦクラスに足を進める。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1169s/

バカと僕とFクラス

2011年10月8日23時01分発行